

田中理絵著

『家族崩壊と子どものスティグマ——家族崩壊後の子どもの社会化研究』

九州大学出版会，2004年

山田富秋（松山大学）

本書は「家族崩壊」を経験した子ども自身の観点から、彼らが主観的に体験するアイデンティティの遍歴、つまり「モラル・キャリア」について、彼ら自身の口述を通して明らかにした労作である。特に「家族崩壊経験者」や「養護施設入所者」といった社会的カテゴリーが、実際の生活の寂しさや不安定さ以上に、破壊的な効果を持つスティグマになるという主張が、彼らの社会化過程をモラル・キャリアとして再構成していくことによって見事に例証されている。特にそこで彼らが不可避免的に直面する「社会の〈正常〉な成員であるならば、〈異常〉な自己を認めよ」（本書162頁）というダブル・バインド状況の指摘と、この状況を解決しようとする個人的な努力が、意図せざる結果として、スティグマの個人化と不可視化に結びついていくというアイロニーの指摘は説得力を持っている。

まず本書を概観しよう。本書は序章「本研究の課題と方法」第1章「家族崩壊と子どもの社会化に関する研究の検討」第2章「家族崩壊と児童養護」第3章「家族崩壊と子どものモラル・キャリア」第4章「家族崩壊と子どものスティグマ」第5章「家族崩壊と子どものパースペクティブ」終章「要約と今後の課題」という構成になっている。序章と第1章において著者は、従来の研究が「家族崩壊」概念を、最初からマイナスの価値を帯びた当為概念として前提しているため、「家族崩壊経験者」を「社会化の失敗」としか把握してこなかったことを批判する。つまりこの概念は、具体的な現実を捉えるための操作概念ではないということである。さらにこの概念は健康と病理について固定した基準があると前提している。しかしながら、ラベリング論のベッカーが鋭い批判を展開したように、何が健康で正常なのかは、固定した基準がない。むしろそれは当該行為に対する人々の社会的な反応（社会的反作用）に、つまり当該の社会的カテゴリーに対する社会的な解釈に依存しているのである。逸脱は社会的に構成される。（本書、23頁以降）したがって、現実の「家族崩壊」を調査しようとするなら、自ずから「家族崩壊」を経験した人々の「主観的」経験を研究することになり、それには彼らが実際に語った口述を材料とすることが最適だという結論になる。

この研究は、従来のように「家族崩壊経験者」を単なる「病理」とか「犠牲者」といった受動的な存在と見なすのではなく、彼らもまた「人びととの相互作用に反応し、他者に影響を及ぼす主体的な存在」（本書、2頁）と考える点で、これまでの研究方法と決定的に異なると考える。なぜなら、もし彼らを主体的に解釈し、能動的に反応する行為者として捉えるならば、彼らが自己の体験をどのように解釈して相互行為を行うのか明らかにしなければならなくなるからだ。当然ながら、著者が採用した研究方法は、パークやヒューズといったシカゴ学派社会学の伝統を踏まえ、行為者の解釈過程を重視する象徴的相互作用論の方法であ

る。つまりより具体的には、アイデンティティの時系列的（継起的）な変容過程に焦点を当てた、ゴッフマンの「モラル・キャリア」概念を経験的な研究に応用していく道である。

こうして、彼らのモラル・キャリアを再構成する第3章は本書の中核をなす部分になる。彼らに対する「社会的なまなざし、あるいはレッテルの貼り替えによって、自己を取り巻く日常生活世界が変容させられる」。この継起的な過程こそ、彼らの社会化過程が可視化される過程であるからだ。（79頁）著者はそれを(1)児童養護施設への入所(2)児童養護施設入所期間(3)施設退所後という三段階に分けて考察する。まず(1)では「自己および自己を取り巻く周囲の人間に関するプライバシーをすべて晒され、それが公的記録に残される」（115-6頁）ために、自己統制の能力・権利を奪われる地位降格（ガーフィンケル）の体験である。それは否応なく「憐憫と排除」のカテゴリーに帰属させられる体験でもある。(2)では施設の規則や社会的期待に応える第一次的調整が行われ、同時に、そのなかでも自己コントロール感を獲得するために、軽微な規則違反を行うといった第二次的調整が行われる過程である。(3)は予期的な社会化をする過程で、退所後に差別が最も顕在化する機会となる、結婚と就職が彼らに重くのしかかってくる。興味深いのは、以上のようなモラル・キャリアのモデルが、口述のテキスト分析を通して導出されたことである。ここではドロシー・スミスの分析例をモデルとして、口述というテキスト自体にそれを読む方法の指示（インストラクション）が埋め込まれていると解釈されている。

第4章においては、彼らが「家族崩壊を経験した子ども」として社会化する過程で直面するダブル・バインド状況が明らかにされる。すなわちそれは、両親がいる家族が普通（ノーマル）だとする常識を彼らが獲得すればするほど、自分たちが置かれている状況を「異常」なものとして、つまりスティグマとして認識せざるをえなくなる窮地である。このような常識の自明性のもたらす破壊力の指摘は現象学的である。本書のクライマックスは、この「普通」とスティグマ化された生活というダブル・ライフの解決がアイロニーに満ちたものであるという分析にある。というのも、たとえこのスティグマが社会に源を持つものであっても、「個人の年齢/時間軸のなかでそのスティグマの強度の変化が起き、そのことを当事者たちが想定しているため、実際に訴える力をもったときには、自己の辿る生活過程のなかで解消をめざすことを選ぶようになる」からである。つまりモラル・キャリア(3)の予期的社会化の段階において、スティグマが個人化され不可視化されるのである。

以上、本書はこのテーマについて先駆的研究であるだけではなく、「家族崩壊経験者」というスティグマの不可視性のメカニズムをモラル・キャリアに沿って分析した労作である。しかし最後に少しでも問題点を指摘するならば、本書の理論的前提となっている象徴的相互作用論を初め、ラベリング論やエスノメソドロジーなどの立場について、従来の客観主義的なアプローチと対比しながら包括的に論じる紙幅が必要であったのではないだろうか。もしこの作業ができていたならば、現在の社会構築主義が問題とするような、社会調査における研究者と研究対象者との関係についても、従来のそれとどう違うのか明示化する議論も可能であったと思われる。